

第12回 堺・南大阪のことば

著者	西尾 純二
引用	上方文化研究センター研究年報. 2007, 8, p.17-18
URL	http://hdl.handle.net/10466/10847

ているのには意味がある。古墳は河内に移ってきているが、死の世界である古墳と生の世界のシンボルである宮とは分けて考え、難波の宮は副都であり河内王朝論は成立しないと云えるだろう。日本最大の仁徳陵が、反正・履中と並び堺に作られたのは宮都との関係で二上山の前に海から側面が見えるように作る必要があったからである。古墳が大きければ権力があるかといえば絶対的ではなく、応神陵が大きい墓を作ったのは岡山吉備の政権に対して権威を保つためであり、相対的なものである。その流れの中で仁徳陵が作られ、大王が持っている権威、目に見えない宗教的権威を見える形にした。

古墳時代が終わる 6 世紀末から 7 世紀初めには前方後円墳ではなくなり、最下位であった方墳を一番上のランクに持ってきたのは蘇我氏である。蘇我氏滅亡の後には八角形の墳墓を作るといのように、政権交代と関連して前方後円墳から方墳、八角形へと墳型が変わっていく。大王墓を考えると、政治中心に考えられ過ぎであるが宗教的にも考えるのが重要であり、仁徳陵は大きいという見える視点と目に見えない隠された力を見直し、日本を東アジアの中で見直すきっかけとなることを古代の古墳は我々に語りかけている。

1500 年間守られてきた仁徳陵を今に再生させるにはどうしたらいいか、もう一度考え、どのように活用し残していくかが課題である。

第 12 回 堺・南大阪のことば

1 月 18 日

西尾 純二（大阪府立大学人間社会学部講師）

1. 「大阪・堺・南大阪のことば」の捉え方

どんなことばが大阪ことばかを考えてみたときに、例えば「～し（や）へん」（関西一帯）、「～し（や）はる」（京都・九州にも）、「しんどい」（共通語になりつつある）、「始末（節約の意）」（京都にも）というように、大阪限定のことばは殆んどない。そこで大阪ことばを考えるには大阪というエリアのことば事情を、①大阪ことばの今昔②大阪の方言区画③暮らしのことば今昔、の三つの視点から考えていきたい。

2. 大阪ことばの今昔

「ジャ」から「ヤ」の言語変化の仕組みを言語資料から見ていくと、約 300 年前の近松門左衛門『曽根崎心中』では、「ジャ」ばかりが使われ、約 130 ～ 140 年前の一荷堂半水『穴さがし心の内そと』では「ジャ」が 264 例「ヤ」が 7 例あり「ヤ」の萌芽が見え、

明治時代の上落語資料では明治中期は「ヤ」と「ジャ」の使用は拮抗状態にあり、明治末期になると完全に「ヤ」が優勢になる。しかし「ジャ」は消滅したのではなく、強意・罵倒表現として現在でも大阪ことばに生きている。このように「ヤ」は「～にてあり」から発音労力軽減の法則に従い変化する。現代は人伝いのことばの変化に加えて、マスメディアや教育による伝播（共通語化）・人の遠距離移動（又は移住）による伝播の形態による変化がある。

3. 大阪方言の区画

大阪方言には摂津方言・河内方言・和泉方言があり、堺のことばは、かつては和泉方言として位置付けられていたが、大阪市が巨大化し大阪府全体が大阪市の文化圏内になりつつあり、堺・南大阪も例外ではなく大阪市方言化していく。

4. 暮らしのことば —船場・堺・南大阪—

暮らしの形態とことばは、しばしば対応し、生活の変化に伴いことばが変化したり、新しいことばが生れたりするのは言語現象の一つである。また、ことばを通して地域の交流状況・社会状況が分かる。現在では衰退している船場ことばは本来の正統な大阪ことばではなく、伏見商人・近江商人の流入（彼らのことばの流入）によって形成されたと考えられる。堺のことばを考えるに当っては『なつかしい 堺のことば』（堺民俗会・2006・堺泉州出版会）を参考にすると、旧市内でも江戸期からの旧家と一般の商家のことばは違うことが記され、旧市内のことばを「都会語」「上流語」として位置づけ、卑称や田舎のことばは旧市内では余り使わないという意識が見られ、周囲との違いが鮮明である点で船場の状況と類似している。

5. おわりに

意識を越えた実態研究が必要であり、混質性とか変化のあり方自体に堺のことばらしさを見つかることができる。時代の風を受け、人々の生活や感性を通して、ことばは生まれ変化する意味において、ことばは時代の映し鏡であるといえる。残しておきたい愛着ある堺のことばに「せいてせかんさかい」（急ぐけれども急がない。けど急いで）がある。商業都市としての活気と、ものを頼むときの配慮が見られ、いいことばである。